

公共施設の立地による歩行者回遊行動への影響

ー前橋プラザ元気 21 を事例としてー

前橋工科大学 ○学生会員 草谷 昂嗣

前橋工科大学 正会員 湯沢 昭

1. はじめに

地方都市を中心として中心市街地の衰退が進んでおり、大きな問題になっている。現在、この問題を是正することを目的として、様々な中心市街地活性化に関する取り組みが活発化してきている。それらの政策のひとつに、中心市街地への公共施設の整備がある。これは中心市街地の衰退の原因と考えられる郊外への分散した公共施設整備を中心市街地に立地させることで、来街者の増加と中心市街地の歩行者回遊行動を促進させるという目的がある。それによって中心市街地での市民交流が活発化し、賑わいのある街の創造が期待できる。

そこで本研究では、中心市街地活性化政策として、公共施設の立地による中心市街地への歩行者回遊行動への影響を明らかにすることを目的とする。

これまで公共施設整備について扱った研究はあるが、歩行者回遊という観点からの事後評価を扱ったものは少なく、本研究の意義が見出せる。

2. 対象地の設定

本研究では、平成 19 年 12 月 8 日に前橋市の中心市街地活性化を目的にオープンした、前橋プラザ元気 21 を中心市街地への公共施設整備とした。また同施設が立地する中心市街地活性化基本法に定める中心市街地重点地区 25ha を中心市街地として本研究の対象地区とする(図-1)。

前橋プラザ元気 21 は、平成 16 年 1 月に閉店した大型商業施設の空き店舗を活用し、中心市街地の核として前橋市が全面改装して再整備したものである。施設の取得・整備費は 50 億円で、このうち半分以上である約 28 億円は国からの支援金を活用している。国のまちづくり交付金を既存施設の改修に適用するのは全国で初めての事例である。施設内容は音楽スタジオや料理実習室を備えた中央公民館や無料で利用できることも図書館、市のにぎわい観光課などといった公共施設がメインとなり、さらにスーパーマーケットなどの商業施設と医療福祉専門学校を含む複合施設となっている。平均来館数は 1 ヶ月延べ 10 万人を超える施設となっている。



図-1 前橋中心市街地地図

表-1 アンケート調査の概要

調査日	平成20年7月4日・5日
配布方法	直接配布
回収方法	郵送回収
配布枚数	1450
回収枚数	455
回収率	31.40%
調査項目	・個人属性(性別・年代) ・利用目的、交通手段 ・中心市街地利用状況調査

3. 研究方法

調査概要としては、元気 21 ならびに中心市街地の利用実態を明らかにするために施設の利用者を対象にアンケート調査を行った。実施方法はアンケート調査用紙を施設利用者の退館時に直接配布する直接配布郵送回収方式を採用した。アンケート調査の概要は表-1 に示すとおりである。アンケート調査の結果から、元気 21 のオープンによる中心市街地の来街回数の変化を明らかにする。また前橋市が行っている同地区の歩行者交通量調査のデータを用いて中心市街地の歩行者交通量の推移をみる。このような観点から施設の立地による歩行者回遊行動の影響を検討する。

4. 研究結果

アンケート調査結果によると、公共施設整備により個人の中心市街地へ行く回数に変化がみられた。元気 21 が中心市街地に立地してから中心市街地の利用回数が「やや増え

キーワード：中心市街地、公共施設、歩行者回遊

連絡先：〒371-0816 群馬県前橋市上佐鳥町 460-1 前橋工科大学工学部建設工学科

TEL/FAX：027-265-7362 E-MAIL：yuzawa@maebashi-it.ac.jp

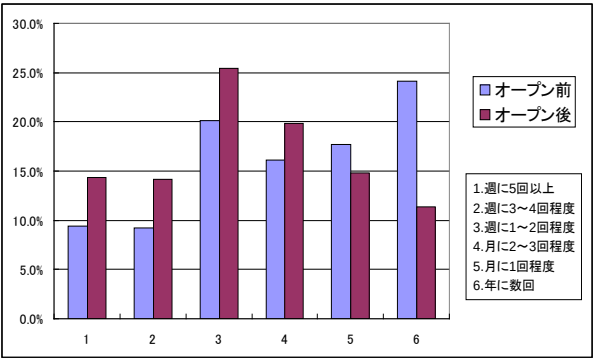


図-2 中心市街地に行く回数の変化

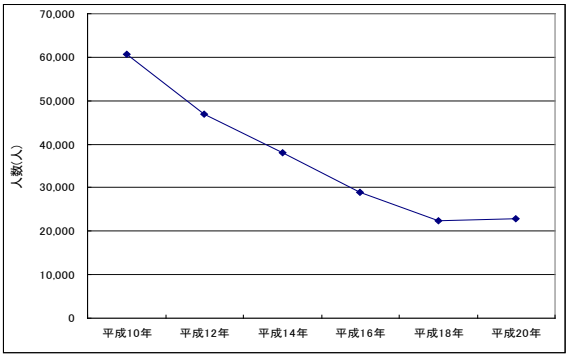


図-3 中心市街地の歩行者量の推移

た」、「非常に増えた」という回答が全体の45%という結果が得られた。これにより、利用者の意識として中心市街地へ出向く回数が増加したといえる。さらに利用頻度の比較のグラフを図-2に示す。元氣21のオープン前は、中心市街地へ行く回数が「年に数回行く」という回答が回答者の24%と最も多くを占めていたが、元氣21のオープン後には「週に1~2回程行く」という回答が回答者の26%と最も多くを占めている。よってグラフから全体的に元氣21の立地により中心市街地の利用頻度が増えているという結果が得られた。

そこで実際の歩行者交通量の現状をみるべく、平成10年から平成20年の中心市街地歩行者回遊量調査の結果を用いて、近年の中心市街地歩行者交通量の推移を図-3に示す。図より、ここ10年間で歩行者量は減少の一途を辿っていることがわかる。しかし平成19年の元氣21のオープンにより平成18年から平成20年の間では歩行者量の大きな減少を避けたといえる。これにより実際の交通量の面からも、元氣21の立地が中心市街地の歩行者交通量の増加に影響しているといえる。しかし10年前の歩行者交通量と比べると現在は3分の1程度の歩行者交通量しかなく、中心市街地活性化につなげていくには、今後歩行者交通量を増加に転じさせなければならない。そのためには中心市街地を利用する際、元氣21の利用のみに終わらず、中心市街地へ回遊する人々を増加させる必要がある。

表-3 数量化理論第Ⅱ類

要因	カテゴリー	カテゴリーウェイト	レンジ	偏相関係数
年代	10~20代	-0.590	1.337	0.362
	30~40代	-0.755		
	50~60代	0.582		
	70代以上	0.365		
年間利用回数	1~10回	-0.348	0.650	0.171
	11~25回	-0.080		
	26~50回	0.217		
	51回以上	0.302		
利用目的	習い事・趣味	-0.332	0.653	0.157
	会議・学習	-0.338		
	保育	0.194		
	交遊・娯楽	0.315		
	その他	0.168		
出口	南西	-0.033	0.397	0.091
	北	0.158		
	2階	-0.238		
同伴者	自分一人	-0.038	0.579	0.104
	家族	-0.064		
	友達	0.515		
利用交通手段	自動車(駐車)	-0.499	1.187	0.280
	公共交通	0.637		
	自転車	0.157		
	徒歩	0.689		
	回遊した	0.614	的中率 0.770	相関比 0.328
	回遊しない	-0.532		

そこで、中心市街地を回遊する利用者の傾向を明らかにするために、年代、元氣21までの利用交通手段等の個人属性を説明変数とし、中心市街地の回遊の有無を目的変数として数量化理論第Ⅱ類による分析を行った。結果を表-3に示す。相関比0.328とやや弱い相関となったが、レンジと偏相関係数間に不整合は見られず、また、判別の中率も77%と低くはないため分析に耐えうる結果であると考え、考察していくことにする。結果より、中心市街地を利用する人の傾向をまとめると、年代では「50歳代以上」といった高い年齢層で、利用交通手段では「公共交通」、「徒歩」による手段で元氣21を利用して、年間利用回数から元氣21の利用回数が多い人ほど中心市街地を利用しているということがわかった。言い換えれば、若い年齢層で、車によって元氣21へ訪れ、同施設の駐車場を利用しているため2階出口を利用した人は、元氣21内の施設の利用のみで終わってしまい中心市街地への回遊行動はしないという傾向があることがわかった。

5. まとめ

前橋の中心市街地において元氣21の利用は比較的良好なものであるといえる。しかし中心市街地全体の活性化につなげるためには、元氣21利用者が同施設を利用する前後で中心市街地の店舗や施設を利用するといった波及効果を今以上に増加させる必要がある。

元氣21内の「こども図書館」、「子育てひろば」といった施設は一日の来場者数が休日は1,000人を越える人が利用する集客力の高い施設であるが、利用者の大半は小さい子を連れた30歳代であるため、施設の利用者の増加が中心市街地の歩行者回遊量は増加につながっていない。この利用者の中心市街地への波及を高めることが、中心市街地の歩行者回遊量を高めるためには必要不可欠であると考えられる。